

平成 29 年

10

月号

No.471

月刊

日本教育

特集

働く



公益社団法人 **日本教育会**

—Japan Education Corporation for the Public Interests—

特集 … 働く

教師の仕事——イギリスの教育改革から日本の教師を考える……………	6
	植田 みどり
産学官の連携で取り組む——「日向の子供たちの未来づくり」の挑戦……………	10
	高森 賢一
ものづくりに挑む女性経営者の「今」……………	14
	大宮 知信

巻頭随想 私の提言

「無意識の力」と教育……………	4
	町田 宗鳳
道徳科の重要課題としての「遵法」……………	5
	藤川 大祐

話のみなもと

こころの健康……………	18
	宮下 研一
自然と科学……………	18
	吉田 稔
表紙写真によせて……………	18
	編集部

ひろば

「トビタテ！ 教員プロジェクト」始動……………	30
	文部科学省初等中等教育局国際教育課
平成29年度 教育予算に対する要望書……………	32

◆連載6◆ JAPAN NOW

石見銀山・古民家再生と景観事業……………	20
	松場 登美

◆連載17◆ 子どものこころ

子どもから学びたい公正……………	22
	倉掛 秀人

◆隔月連載3◆ 今、日本人の幸福について考える

子どもが育つ場とは何か……………	24
	池田 雅之

◆連載17◆ ことば新事情

競技で異なるスポーツのことば……………	26
	加藤 昌男

■文教ウオッチ

小学校の英語は誰が教えるのか……………	28
	野原 明

次号予告・編集後記……………	34
----------------	----

働く

産学官の連携で取り組む

「日向の子供たちの未来づくり」の挑戦

宮崎県日向市教育委員会
学校教育課長補佐

高森 賢一

たかもり けんいち
1988年青山学院大学文学部教育学
科卒業。1989年4月より小学校教
諭。2007年4月より宮崎市教育情
報研修センター指導主事。2010年
4月より宮崎県教育庁学校政策課指
導主事。2013年4月より小学校教
諭。2015年4月より現職。

はじめに

JR日豊本線日向市駅の近く、電車の車窓から日向商工会議所の建物が見える。その壁には、「日向の大人はみな子供たちの先生」という日向市のキャリア教育のキャッチフレーズを記した看板が掲げられている。

本市は、宮崎県の北東部に位置し、重要港湾「細島港」を擁する人口約六万三〇〇〇人の港湾工業都市である。平成二十五年度から、日向商工会議所を中核として、「日向の大人はみな子供たちの先生」を合い言葉にして、働く大人「よのなか先生」が子供たちに本気で「働く喜びと苦勞」を語りかける授業「よのなか教室」を行うとともに、「よのなか先生」に対する研修会等を実施するなど、学校だけでなく、企業や行政、地域などを巻き込み、産・学・官をあげてキャリア教育の推進に取り組んできている。

本稿では、日向市の産学官の連携で取り組む「日向の子供たちの未来づくり」の挑戦の一端を紹介する。

一 活動開始の経緯

この活動は平成二十五年に始まった。宮崎県教育委員会からキャリア教育の事業のパイロット地区としての指定の話があり、日向市では、市教育委員会ではなく、日向商工会議所が中核となってこの事業を受託することになり、日向市教育委員会のキャリア教育推進事業の委託も同時に受け、「まちぐるみ」でキャリア教育の推進に取り組む活動を開始した。

大阪商工会議所や横須賀商工会議所などの視察を経て活動方針を固め、日向商工会議所内の一室にキャリア教育支援センターを開設し、三名のコーディネーターを配置して、学校と企業や地域を結びながら、「日向の子供たちの未来づくり」

プロジェクト」を推進して五年目を迎えている。

二 産学官の高度な連携によるキャリア教育

まず「産」について。この取組の中心となっているのは、前述したように、働く大人「よのなか先生」が子供たちに本気で「働く喜びと苦勞」を語りかける授業「よのなか教室」である。通常、学校で外部から講師を招聘する場合は、「謝金」や「交通費」をどうしようかと検討することが多い。しかし、本市は「よのなか教室」で派遣される「よのなか先生」には原則として一切「謝金」も「交通費」も支払われない。それは、日向商工会議所の強力なリーダーシップのもと、「人手不足時代を先取りして、将来の産業人材として、地元で強い愛着をもった小中高校生の育成に着手しなければならぬ」という課題意識を産業界の方々が共有できていることの表れでもある。

次に「官」について。本市は、平成二十七年

特集◇働く

一〇月に「元気な。日向市。未来創造戦略」という地方創生戦略を策定した。その中に、「ふるさとを愛し日向の未来を支える人材の育成」を位置づけ、「よのなか教室」を核としたキャリア教育支援事業の推進を明示している。また、本年度からスタートする第二次日向市総合計画においても、重点戦略①として「未来へつなげる人づくり戦略」を位置づけ、キャリア教育の拡充を明示している。本取組の最初の三年間は、県教育委員会の事業のパイロット地区としての指定もあったので、県の財政支援も受けていたが、昨年度からは、日向市の重点事業「キャリア教育推進事業」として単独事業として予算化している。「日向の子供たちの未来づくり」としてのキャリア教育の取組に行政としても本気で



日向の子供たちの未来づくり



参画し、「産」「学」に挑戦する覚悟である。次に「学」について。日向市教育委員会は、キャリア教育支援センターと常に連携し、コーディネーターや日向商工会議所の代表らとともに、指導主事が熱い議論を続けている。また、日向市新赴任教職員歓迎研修会を教育委員会でではなく、キャリア教育支援センターが主催で実施しているのもユニークな取組である。新規採

用教職員や日向市への転入教職員がキャリア教育について学ぶ機会を設けてくれている。さらに、キャリア教育支援センターが、「キャリア教育通信」を発刊し全教職員に配付している。平成二十七年六月から発刊を始め、現在第十八号まで続いており、各学校におけるキャリア教育の継承や発展に大いに役立っている。

三 「キャリア教育」で何を指すか

キャリア教育で何を指したいのか。「フリーター、ニート対策ではない」「職業教育のみになってはいけない」「若年者雇用促進だけではない」などいつも確認している。将来どう生きるかを考えさせる教育だと捉えている。子供たちには常に「何のために学ぶのか」「何のために働くのか」を考えさせることが必要だ。

しかし、キャリア教育の取組は、学校の教職員だけでは無理がある。学校や教職員は、どうしても「社会」から乖離している感があり、教職員の言葉にはその点若干説得力が足りない。そのために、社会や地域の人の力を借りて、子供たちに「将来」を「リアルに」考えさせる仕組みが必要であった。その仕組みや理念づくりのために立ち上げ、その後、本市のキャリア教育の方向性、成果や課題の確認を行ってきた組織が、日向市キャリア教育推進懇話会である。

平成二十五年八月に、本懇話会は発足した。年二回定期開催されてきた。産業界（工業会、農林水産の各組合、建設業協会、商店会、医療福祉団体など）、行政、学校の代表が集い、産官学を挙げて、問題や課題の研究・協議を重ねてきている。その結果、特に「よのなか教室」を通して、

- ・「将来どう生きるか」を考えさせる機会を増やしたい。
- ・学ぶ意欲を高め、「学力を向上」させたい。
- ・日向を子供たちが「喜んで住み続けたい」と思う街にしたい。

という三つの理念・方針を固めた。キャリア教育の理念・方針に「学力の向上」を明確に位置づけた。「日向の子供たちに未来づくり」には、学ぶ意欲の向上も含め、学力の向上は欠かせないことを私たちは常に意識して取り組んでいる。

四 活動の中核は「よのなか教室」

私たちが取り組む「日向の子供たちの未来づくり」の中核は「よのなか教室」である。「よのなか教室」とは、一言で言うと、地域で働く大人が子供たちにこれまでの成功談や失敗談など、働く喜びや苦勞を本気で語り掛ける授業のことである。総合的な学習の時間や道徳の時間、学級活動や教科の関連的な学習の時間に実施している。

「よのなか教室」で働く喜びや苦勞を語って

ただ方々を「よのなか先生」と呼んでいる。会社の経営者や管理職だけでなく、若手や中堅、個人で起業した人、失敗を味わった人、仕事と関連させながら地域の振興に努めている人など、様々な人に「よのなか先生」として登録していただいている。前述したように、完全ボランティアである。にも関わらず、現在二〇〇人を超える方々に登録してもらっている。

私たちは、「よのなか教室」の実施により、学校において新しい行事が増えるのではなく、これまでの授業や活動を充実させるために「よのなか教室」を実施すると捉えてほしいと学校に訴えてきた。アイデア次第で既存の様々な活動との組み合わせを行い、これまで多様な「よのなか教室」が実施することができている。

「よのなか先生」の登録は、キャリア教育支援センターが中心となつて、様々な企業や団体に依頼をしながら進めており、様々な職種や経験をもつ方々が登録してくださっている。私たちはデータベースのサイトを作成して「よのなか先生」を登録し、各学校から検索ができるようにした。また、各学校で「よのなか教室」を実施した後は、その活動計画や活動記録、写真などをデータベースのサイトにアップロードするようにし、他の学校が、どんな「よのなか先生」を招聘し、どんな「よのなか教室」を実施したのか参考として調

べられるようにしている。できるだけ、多様な大人から、多様な経験や考えを聞くことで、子供たちは「働く意味」を感じ取り、それぞれ将来どう生きるかを考え、何のために今学ぶのかを意識し出すのではないかと捉えている。派遣される「よのなか先生」の選定は、キャリア教育支援センターのコーディネーターが調整を行っている。取組を進める中で、徐々に学校独自のネットワークも広がりをみせ、独自に「よのなか先生」との派遣調整を行う学校も少しずつ増えてきている。

五 「よのなか教室」の持つ力

「よのなか教室」を受講した子供たちにとつては、普段先生から聞いていた話が、「よのなか先生」の話により、現実の生の社会でも同じであることに気づき、社会への理解が一段と深まり成長するきっかけになっている。また、働く大人に対して、一種の「あこがれ」のようなものを持つ子供も増えてきた。子供たちは例えば次のような気づきを残している。

- ・自分の行きたい進学先、自分のやりたい仕事に進むことは簡単にはいかないこと
- ・失敗しても悩みなが夢を持ち続けなければならぬということ
- ・学校の勉強は面倒くさいけど大事だということ
- ・学校で指導される挨拶や礼儀、時間を守るこ

との大切さは、社会に出てもとても重要だということ

また、「よのなか教室」を受講したことがある小・中学生が、その後に行われたある意見発表会において、次のような意見発表を行っていた。

・私は「よのなか先生」から、「失敗してもめげない」とか「不可能と思うようなことを実現したい」とか「人の役に立てるようにもつと努力したい」という話を聞いて、その生き方や考え方が（かつこいい）と思いました。（小六女子）
・僕は、新しい自分を発見しながら周囲から尊敬されるような大人になっていきたいです。
そして、いつか母校で、先輩の生徒たちの前で「よのなか先生」として話ができればいいなと思います。（中一男子）

教師の意識改革や授業改革にも「よのなか教室」の実施は役立っている。本市の「よのなか教室」では、学校に来てくださる「よのなか先生」が決定したら、原則として、担当する教師が「よのなか先生」の職場を訪問して事前打ち合わせを行うことにしている。そうすることで、先生方に新たな気づきや学び、アイデアが生まれ、その後の授業の工夫・充実につながることが分かってきたからである。また、「よのなか先生」と一緒に現実の社会とのつながりを意識しながら授業をつくり上げていく経験は、教師の授業力向上につ

ながっていると感じている。「よのなか教室」を実施した教師が次のような感想を残している。

・単元や本時の目標の達成を図りながらキャリア教育のねらいも取り入れられるか心配したが、「よのなか先生」が専門的な立場から苦労や喜びを生の声で話していただいたことで、逆に教科のねらいにも迫ることができたと感じた。特に、授業後の子供たちの意欲的な活動の姿からそのことを実感した。

・県外や海外での多様な経験をもつ「よのなか先生」の話に、子供たちは引き込まれていった。このような多様な価値観に触れる機会を今後も設定していきたい。また、私たち教師も学校以外の方ともつと交流していくことで、教師力を高めていけるのではないかと改めて感じた。

さらに、「よのなか先生」を派遣する企業や団体にとつてもメリットがある。例えば、若い社員中堅社員が子供たちの前で話すことで、普段の仕事を一息立ち止まって考える機会になり、自らの仕事観を見直す気づきが生まれ、社員が成長する場になるという報告も受けている。「よのなか先生」の振り返りコメントを二つ紹介する。

・過去にも教室で話す経験はあり、うまく話せなかった苦い記憶が残っていたが、今回の「よのなか教室」は担任の先生と共同作業。先生のテンポの良い進行に助けられ、無事最後まで務

めることができた。後日児童全員の感想文が届いた。その文面から職業について子供なりに理解し自分の生活に生かそうとする姿が伝わってきた。地域の大人が働く意味を語ることで、将来を考えるきっかけづくりを手伝う意義は大きい。ほんの少しだが子供たちの成長に触れて、その思いを強くした。

・先日、あるクラスで話をする機会を頂いた。先生との事前打合せでは、子供が自分の良さや周りの人の良いところに気づけるような内容にとのこと。難題だ。当初、何を話そうかと頭を悩ませたが自分を省み、子供たちと向き合ったことで、人への興味や人への関わりが、今の仕事はもちろん、生きていく上で欠かせない大切なものだと思いつき返す機会になった。

六 まとめにかえて

取組も五年目を迎え、子供や保護者の意識も少しずつ変容を見せ始めている。将来の夢や目標、自分の生き方を考える子供が増えつつある。また、家庭で仕事の意味や喜びを子供に話す保護者も増えつつある。

これから確実に本市でも「人口減少」「圧倒的な人手不足」という課題に直面する。私たちの挑戦が、将来この課題に立ち向かう子供たちの原動力になることを強く願う。